

あとひと月しかない



もうすぐラマダンが明けます。一ヶ月間断食していたエミラティの児童生徒もたいへんだったでしょう。日本人の児童生徒たちも彼らに気遣いながら生活していたことは、きっといつか役にたつでしょう。夏休みまであと丁度ひと月。はやいものです。1学期の勉強も追い込みになります。明日からは、中学生は期末テスト。頑張ってください。その後はラマダン明け5連休。

受験が近い人は休みをどう使うかが大切ですね。



人の振り見て我が振り直せ

今時、日本で電車に乗ると、車内はシーンとして、かすかにカチャカチャとした音。みんな、手にスマホを持って、じっと画面を見つめている。なんとも異様な光景だ。

私が学生時代に見ていた光景は、駅のホームのミルクスタンドで、サラリーマンたちが慌てた様子で、横一列に並び、片腕を越しに置き、瓶入り牛乳を一気に飲み干して満員電車に乗る。目的の駅までの時間を惜しむように、新聞を周りの人たちに迷惑にならないように、小さく折り畳んで読む。或いは、文庫本を読む。こんな朝の光景でした。

「最近、いつでもどこでも、皆、無言でスマホ。家庭内でもスマホ。食事の時もスマホ。スマホ中毒だな。」と批判していた私でした。

最近、学校にスマホを忘れて帰りました。その夜は、手持ち無沙汰で手持ち無沙汰で、時間が経たず困ってしまいました。いつもは、スマホで日本のテレビ放送を観たり、LINEをしたりしている私です。つまり、いつの間にか私もスマホ中毒になってしまっていたのです。



「めし代のない人 お腹いっぱい ただで食べさせてあげます。ただし食後30分間お皿洗いをさせていただきます。大学生限定」

こんな張り紙を店先に掲げて35年間、多くの若者に親しまれてきた店が京都にある。店主の井上さん(67)は、「お金がなくて、皿洗いたした学生の中には、弁護士になった人もおんねんで」と目を細める。

「皿洗い30分」で定食をタダにしてきた35年間、昔は1日に8人が皿洗いを申し出ていたが、最近では多くて1日3人ほどだと言う。

店の近くには京都大学や同志社大学があり、客のほとんども学生だ。

「ほんまは、『皿洗いさせて』と言うた勇氣に免じて、皿を洗わなくてもタダでいいと思う。衣食住で『食』が一番大事や。金が無くても腹は減る。学生は、勉強して偉い人になったらええ。」と井上さんは言う。

「若い頃、オレも散々苦労した。めし代のない時代もあったんや。」

井上さんは20歳で結婚し、すぐに子どもができた。必死になって働いたが、その日の食事にも困ることがあった。あるとき、年配の知人から「晩飯を一緒に食べへんか？」と誘われたことがあると言う。井上さんは今でもこのことが忘れられない。

「名前も顔も覚えとるわ。自分の子どものように、よう可愛がってくれた。もうこの世におらんから、直接、恩返しできへん。せやけど、幸いにも、こういう商売しとるわけやから、今の若い子らに食べさせることになるわな。」



「卒業してからも尋ねてくるやつも大勢いる。医者になったやつは、『おっさん、金に困ったらタダで診たる』と言うてくれる。」と言う。だが、「そんなに感謝はいらん。」と話す。

「世の中、自分の子どもさえよかったらいい、他人の子どもはどうでもいいと言う人が多い。せやけど、他人の子どもも大事にするんや。そうすると、自分の子どもに『徳』が返ってくると信じてる。そうやって、世の中がよくなっていったらええやん」

